

(3) 大谷の場合 ～「スキルは大人」・「心は子ども」～

1 はじめに

高知山展望台より大島海峡を眺め、「来年こそは、ハミヤ島へ。」と思ったのが、2年前。昨年も「奄美ならでは研修」があったのだが、台風が連続して到来したため、時期が大変遅くなったのだ。その時私は、奄美ではあまり感じることでできない季節の移ろいを感じるため、紅葉真っ盛りの京都行きを優先してしまい、参加をすることができなかった。

「奄美に住んでいるからこそ『奄美ならでは研修』ではないか。」「京都などいつでも行けるではないか。」と批判もあるだろう。どうか言い訳をさせてほしい。人は身近にあるからその価値に気づけないということが往々にしてある。京都に住んでいたとき、清水寺近辺は、おたべと京漬け物がただで食べられる（試食にて）ので、空腹を満たすところとしか思っていなかった。しかし、観光客として訪れると、石畳のきれいな大変「映える」場所であり、認識を改めることとなった。この経験を生かすことができなかったのは情けないことだ。次こそは失敗してはならぬ。その思いから、本年度の「奄美ならでは研修」への参加を決意した。

2 奄美高校→古仁屋港

今回もほぼ眠ることなく、当日を迎える。やはり「無人島でキャンプ」という言葉にどうしても中邑真輔のように「たぎって」しまう（田口隆祐であれば、「ぎたる」だが）。前回同様、学校で全員と合流し、荷物を積み込み、集合写真を撮って古仁屋港へと出発した。古仁屋港近くの公園で昼食を済ませ、船を待った。その間、漁港からすぐ下をのぞき込むと珊瑚やきれいな色の魚を見ることができた。本当に贅沢な話だ。船が着くと荷物を船に積み込み港を出た。

3 古仁屋港→夕離島→須子茂離島

港を出発ししばらくすると、海はエメラルドグリーンの穏やかなものから、深いブルーの荒々しいものへと表情を変える。船首では「海賊王に俺はなる。」と言わんばかりに先を見つめ、上下に揺れる大坪氏の姿が。波も高いが、船のスピードもあり、波しぶきがかんがん顔にかかる。船長の「危ないぞ。」の声もないので、自分も揺れとしぶきにはしゃぐことにした。「やりたい放題（自由）」が一番楽しい。

ほどなくして、キャンプ地候補①の夕離島に到着。岩場をつたって浜に上陸することができるのか確認のために船を降りた。岩場を歩くと潮だまりにきれいな色の珊瑚と鮮やかな色の魚がいた。「これは奄美の宝石箱や～」と彦磨呂なら言っていたであろう。岩場が多い夕離島は、様々な生物が隠れていそうだったので、大変魅力的であったが、岩場から浜に移動することができない状況であったので、泣く泣く次の島へ移動することとなった。

夕離島から候補地②の須子茂離島へはあまり時間はかからなかった。須子茂離島の10メートル底まできれに見える透明度の高い海、広く美しい砂浜を見て、満場一致でここをキャンプ地とすることに決定した。船をできるだけ浜に近づけ、はしごを下ろし、皆で協力して荷物を下ろした。少年ジャンプの三大原則は「友情・努力・勝利」であるが、私の思う壮年キャンプの三大原則は「美しい大自然・やりたい放題（自由）・頼れる仲間」である。「奄美ならでは研修はこの三つが揃っているのだから、少年ジャンプ同様楽しむことができる。

4 拠点の確保→自由時間

島に上陸し、少し散策をした後、どこにテントを張るか、かまどをどこにつくるかを決めなければな

らなかった。須子茂離島は広くきれいな砂浜なので、満潮時のテント沈没の心配はしなくて良いが(前々回はその心配があった)、日陰となるところがない。少しは陰になるだろうと大きな岩のある場所にかまどを作り、その近くにテントを張ることにした。周りは岩しかなく、ライト等を設置するためのひもを何に固定するか難しいところであったが、ひもをなんとか岩に引っかけることでその問題は解消した。本当に頼りになる人たちである。

その後は、宴までの自由時間。まずは、たき火のための流木集め。流木が少なく、浜が広がったので、なかなか大変であった。前々回はそりがあったので、まとめて引きずって拠点に運ぶことができたのだが、今回は手に持てるだけ持って運ばなければならなかった。それに引き替え、漂流物は多くあり、発泡スチロール製の大きなブイ(?)を拾い、椅子として利用した。堅すぎず良い座り心地であった。生活環境が整った後は、海へと向かう。岩場でそこそこ大きな貝を二つ確保した。大富氏によるとホソスジテツボラ(細筋鉄法螺)という貝でおいしいようだ。しかし、それ以外はなかなか発見することができなかった。まだ潮が引いている途中であったため、貝の確保は潮が引いてからすることになった。

海に潜ると、底の方に多くの魚たちが泳いでいた。きれいなミノカサゴやウミヘビも見ることができた。調子に乗って岩場を超えていくと、一気に潮が速くなり流された。「これはやばい。」と本気で泳いだ。「恐怖」を覚えるのも冒険には必要である。ここでうれしい発見が一つ。本気で泳いだときに二軸のフォームになっていたのだ。現役時代は一軸であったが、顧問となってから二校目の時に主流となりつつあった二軸に変更したのだ。ちゃんと身につけてくれたのだなと喜ぶとともに、少しさみしさもあった(詳しい説明は省略します。詳しい人に聞いてください)。

5 宴① 酒と肉とたき火と波

辺りが少しずつ暗くなり始めた。さあ宴だ。かまどに網を置き、小菌氏がどんどん肉を焼いていく。そして、無人島では大変貴重な冷えたビールで乾杯。皆でわいわい話しながら、肉を食う。また、この肉の量が多すぎず、少なすぎず絶妙だ。必要最低限のものしか持ちこまない無人島キャンプにおいて、この購入者のセンスに脱帽である。

焼き肉を食べている途中、「一度ライトを消してみよう。」という提案があった(誰が言ったか忘れたが)。ライトを消すと、急に真っ暗な闇が迫ってきた。明かりは目の前のたき火のみ。ただそのたき火の色、薪のはぜる音はなぜか心を落ち着かせてくれる。最初に火を使用した人は、約50万年前の北京原人と言われている。(北京原人よりも古い約150万年前の南アフリカやケニアにその痕跡が見られるが、それが自然の落雷などによるのか人が使った火なのかは判定が困難である)。火の使用によって、人間の食生活は豊かになり、暖をとったり、動物から身を守ったりすることができ、大きな進歩を遂げることとなる。人がたき火を見て癒やされるのは、この時の記憶がDNAに受け継がれているからではないかと私は勝手に思っている。最近では、たき火の癒しの効果は科学的にも証明されている。1/f ゆらぎと言われているものだ。1/f ゆらぎとは、パワー(スペクトル密度)が周波数 f に反比例するゆらぎのこと(ただし f は 0 より大きい、有限な範囲をとるものとする)。1/f ゆらぎは人をリラックスさせる効果がある。具体例としては人の心拍の間隔、ろうそくの炎の揺れ方、電車の揺れ、小川のせせらぐ音、目の動き方、木漏れ日、蛍の光り方などがある。たき火の揺れにもその効果はあり、現在、リラックス効果があると、たき火だけの動画がネット上に多く見られる。波の音にもこの効果はあるので、無人島でのたき火は最強である。

6 宴② 酒と貝とぜーやんと出汁

肉がなくなり、おなかが満たされたころ、潮が引いているとの情報が。これは、二次会のつまみを確

保しなければ。前々回、おいしく貝をいただいて以来、大坪氏は貝とりにはまったようで、喜々として岩場に向かう。まず、安定の味のマツバガイをいくつか確保することができた。他にないかと岩に張り付いている貝を探していると、何か小さなうねうねした生き物が視界に入った。ライトを向けるとハゼであった。みなハゼの捕獲を始めた。時折来る波で短パンがぬれ、「わーわー」騒いでいたが、みな嫌ではないようだった。そして誰が言い始めたか忘れたが、ハゼのことを「ゼーやん」と呼びながらハゼを追い始めた。「生き物を探す」・「生き物を捕まえる」・「水に濡れる」・「自分たちだけに通じる言葉の発明と共有」これだけの要素が揃うと異様な盛り上がりとなるのは当たり前だ。小学生が騒ぐのと同じである。大きい貝があまりとれなかったので、少し小さなものも確保した。

拠点に戻ると、大きめの貝を網の上で焼いて食べた。鮮度抜群。口の中が貝と磯の香りでいっぱいになる。小さな貝は焼いた「ゼーやん」と一緒に鍋で煮た。すると金色のきれいな出汁が出た。飯山氏の持ってきていたコーヒーフィルターでこすと、さらに輝きを増した美しい出汁に。味も抜群。味噌があればと思っていると、飯山氏がインスタント味噌汁の味噌を持っていた。ありがとう飯山氏。出汁に味噌を入れ、少しずつであったが、うまい味噌汁を飲むことができた。出汁の美味しさは「味付け」とは違う。調味ではつけられない「うま味」と作りものではない「風味」で食べる人を魅了する。だから美味しい出汁がとれていれば、味付けは控えめでも十分満足できる深い味わいが楽しめる。だから「出汁」を基本とする和食は世界中の人々を惹きつけることができるのだろう。今回もまた、非常にいい気分（まだまだ起きていたかったが、明日もあるので）、寝床につくことにした。

7 就寝→起床

テントに入ると、すぐに横になった。気温が高いので、寝袋は使わなかった。海で泳いだため、髪が塩でごわごわする。気持ちが悪いのだが、ある漫画の登場人物の台詞がふと頭に浮かぶ。「あー楽しかった。あたし、今日お風呂入らない！」というものだ。泳いでついた潮のにおい。たき火でついたにおい。今日一日をそのにおいで思い出しながらゆっくりするのは最高だと私は思う。気分は最高だったが、テントの中は暑く、なかなか寝付くことができない。蚊はいないだろうから（アブはいたが）、顔だけ外に出してみようと思った。顔を出し、上向きになると、満天の星空。周りに明かりは何もないため、大変美しかった。星が降ってくるようであった。まさに星の降る夜であった。「tonight 星の降る夜に願い事がただひとつだけ叶うなら〜」という歌詞が浮かぶ。（「Tonight〜星の降る夜に〜」の作詞は下久美子、作曲は布袋寅泰である。あのときはそうだったな。今は「PRIDE」作詞・作曲が布袋寅泰、歌は今井美樹。心にうつりゆくよしなしごとの癖が強い。

結局あまり熟睡できずに辺りは明るくなる。用を足したくなり、浜を歩くと「カサカサ」音がする。見ると20センチぐらいの石に紫色の大きなヤドカリが大量に群がっていた。「ムラサキオカヤドカリ」天然記念物である。見ることができたのは良かったが、あまりに多すぎるとありがたみがなくなる。ふと千利休の逸話を思い出す。『茶話指月集』に朝顔の話がある。内容はこうだ。「ある初夏の朝、千利休は秀吉に「朝顔が美しいので茶会に来ませんか」と使いを出す。秀吉が「満開の朝顔の庭を眺めて茶を飲むのはさぞかし素晴らしいだろう」と楽しみにやって来ると、庭の朝顔はことごとく切り取られて全くない。がっかりして秀吉が茶室に入ると、床の間に一輪だけ朝顔が生けてあった。一輪であるがゆえに際立つ朝顔の美しさ。秀吉は利休の美学に脱帽したという。」話を聞いたときは「やり過ぎだろう」と思ったが、「確かに」と納得する部分もある。かといって一匹を残して他のヤドカリを投げ捨てることはしなかったが（天然記念物なもの。）用を足した後は、「もう、このまま起きよう。」と思い、かまど近くでたばこを吸った。かまどの中の薪はほとんど燃えていたが、少しおき火が残っていた。

8 船が迎えに来るまでの自由時間

たばこをふかしながらボーとしていると、皆続々と起きてきた。軽く朝食を済ませて、くつろいでいると、日差しがどんどん強くなり、それとともに気温が上がり始めた。このままでは全員熱中症になってしまうので、大冨氏が持ってきていたタープを立てることになった。砂浜にペグは打ちづらいので、ロープを固定できる石を探すこととなった。暑い中そこそこ大きな石を運ぶ作業は大変だが、全員ひからびるよりはましである。作業後は涼を求め、海へ飛び込んだ。

海から上がると、少し早めの昼食をとる。片付けの時間もあるからだ。そして、数名は、濡れた服をロープに干すなどしていた。しばらくのんびりしていると、沖に船が見えた。船はこちらに近づいてくる。

迎えの船にしては早い。よく見ると女性観光客がダイビングを楽しみ始めた。せっかく大自然を満喫しに来たのに、浜ではおっさんたちが洗濯物を干す、生活感あふれる光景が。本当に申し訳ないと思った。しかも、結構沖での方でダイビングしていたので、泳いでいて直接わびることもできず、親睦を深めることもできずただただ残念であった。

その後、テントをたたんだり、拠点解体したりという作業をした。そして全員で記念写真も撮った。浜辺でジャンプしたところをとる「映える写真」である。若者には良いが、おっさんたちには、精神的にも肉体的にも厳しいものとなった(ジャンプがあわず結構撮り直した)。いつもは帰りの船を待つ間、「もうこれで終わりか。」と少しさみしい気持ちになっていたのだが、今回はまだ続きが。帰りにハミヤ島によってもらい、少しの間であれば上陸することができるのだ。

9 いざハミヤ島へ

迎えの船が来ると、協力をして荷物を積み込んだ。食材、特に水がなくなると、荷物は非常に軽くなる。行きと同様、船首には大坪氏の姿が。私はその後ろにつけた。船は勢いよく沖へと向かっていく。海の色がどんどん濃くなっていくのがはっきりとわかる。みな進行方向をまっすぐ見つめていた。その先にあるハミヤ島を探すためだ。しばらくすると、小さく砂の丘が見えてきた。「何だあれは。」ハミヤ島がそのようなものであるという予備知識はあったが、それでもその奇妙な風景に驚いた。

上陸するためには、船を着けることができないので、泳いでいかなければならない。大冨氏が「飛び込むところを写してほしい。」私にカメラを渡し、海に飛び込んだ。私もその後につき、飛び込んだ。大変気持ちが良かった。しばらく泳ぐと島に到着した。目の前には傾斜のきつい砂の山があった。砂浜を駆け上がると、歩くたびに砂が崩れるので、思った以上に体力が削られていく。心が折れそうになるが、ここまで来たら絶対に頂上からの景色が見たいと思い、歩を進める。頂上に着いたときはへとへとであったが、振り返ると素晴らしい風景が広がっていた。感無量である。感動に浸っていると「ピー。」という船長の指笛が聞こえる。帰りの合図だ。後ろ髪を引かれる思いで、砂山を降りた。帰りは滑って降りたので、楽しんであった。

10 ハミヤ島→古仁屋港

ハミヤ島を後にすると、ライオン岩・波が岩にあたり、噴水のように吹き上がる場所、青の洞窟など様々なものを見せてもらいながら古仁屋港へと向かった。港に着くと、荷物を下ろし、水で体を洗い、冷たいコーラを飲んだ。冷たさと炭酸が本当に五臓六腑に染み渡る。楽しかったなあと無人島生活を振り返ると同時に「次は何をしようかな。」と次の無人島キャンプに思いをはせた。

11 さいごに

無人島キャンプは不便を楽しむことが重要だ。「こうすればよくなるかな。」と様々な工夫を凝らし、うまくいけばみんな喜び、失敗してもわいわい盛り上がることができる。また、自然は、運動不足であることも厳しく教えてくれる。

人は不便さを克服するために、様々なものを発明し、進化をしてきた。しかし、全ての不便さが克服された世界は、生きていて楽しいのか。それともつまらないのか。私はつまらないと思う。無人島キャンプをするとこのような思いが強くなる。「五感をフルに使って生活する。」今の生活では難しいが、たまにはこう生きたいものである。